

日本文化のオントロジ

—「古事類苑」のデータベース化のために—〔論文版〕

相田 満

Ontology of Japanese culture — For the database of "Koji-Ruien"—

AIDA, Mitsuru

およそ100年前に誕生した百科事典『古事類苑』は、35年間かけて作成された前近代の知識体系の精華であるとともに、今なお日本最大規模の事典である。しかしながら、これまでその成立事情や意義が注目されることは少なかった。本発表は、オントロジの観点から前近代における日本文化の基盤を考察するに際して、『古事類苑』の位置づけと、そのデータベース化への取り組みの一端を紹介する。

'Koji-Ruien' is an encyclopedia that was born about 100 years ago. It consolidates the essence of the knowledge of the former modern ages. They spent 35 years in completion, and as a result it takes pride in a Japanese maximum scale still now. However, nobody knows a lot of the approval circumstances and the meanings. In this report association, I will consider the base of the Japanese culture before modern ages from the viewpoint of Ontology, by the approach on the making to the database of 'Koji-Ruien'.

第1節 日本最大の百科事典

およそ100年前に成立した事典であるにもかかわらず、本文1,000巻、洋装本の体裁で51冊(一部には60冊本もあり)、和装本では350冊という膨大な分量の『古事類苑』が日本最大の百科事典であるという評価は、今でも通用するだろう。

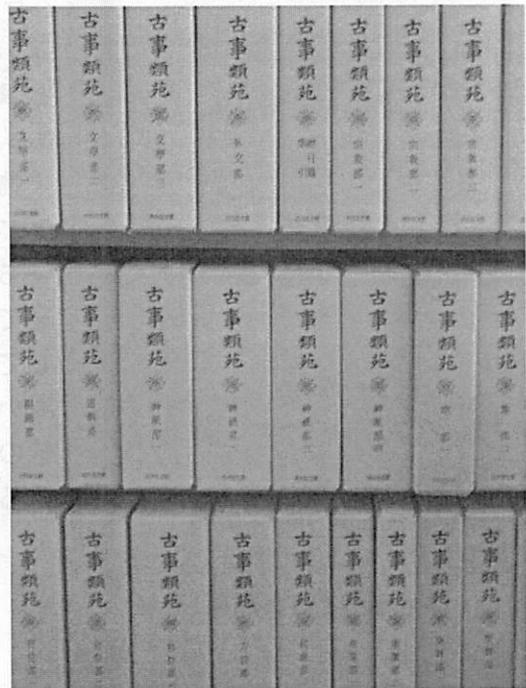
その編纂経緯は、およそ次の通り。

1879年(明治29)に西村茂樹の建議が裁可されたことにより、文部省による編纂作業は始められた。後にその管轄は、東京学士会院、皇典講究所と移るが、編纂開始当初に作業に関わった人たちを挙げると、川田剛、細川潤次郎、佐藤誠實、松本愛重、黒川真頼、本居豊頼、木村正辞、井上頼圀など、そうそうたる名前が並び、万全たる体制で開始された事業であった。

事業は、一時は拡張へと向かいはしたものの、編纂作業は難航し、その完成目処がなかなか立たないことから、幾度も頓挫の危機を迎えた。特に1895年(明治28)に皇典講究所の契約期限が切れた時は、相当に深刻な事態であったようである。

結局は伊勢神宮宮司第67代目宮司鹿島 則文のりふみ(1839-1901)の取り持ちにより、神宮司庁への移管を内務大臣に願い出て、神宮司庁の資金援助を受けることがかない、やっと完成にこぎ着けたのであった。

そして1896年(明治29)年11月8日、第1冊目



[1]洋装版『古事類苑』

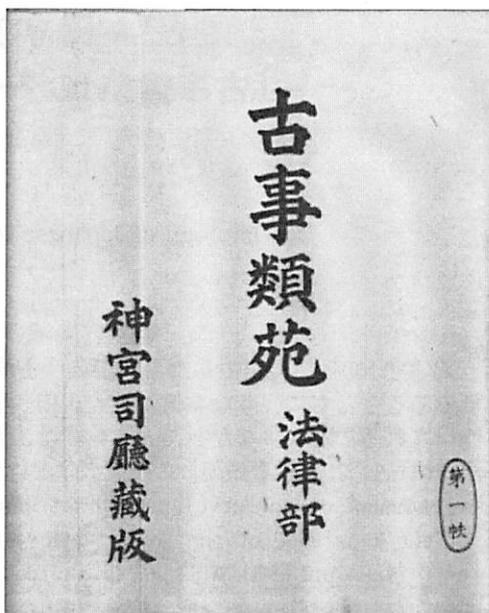
帝王部(第27巻)の刊行は開始された。1907年(明治40)、ようやく編纂終了式を開催する所までこぎつけ、1914年(大正3)に索引を加えて、全巻を無事完成するに至ったのであったが、そこまでの期間は実に35年間に及んだのである。

第2節 いくらかったのか

では、『古事類苑』を作り上げるのにかった費用は、どれほどだったのだろうか。

神宮司庁移管前の記録は判然としないが、1895年(明治28)年度から1907年(大正2)年度までの19年間については、『古事類苑』の「目録・索引」に収録されている「古事類苑編纂事歴」が参考になる。

これは、1907年(明治40)11月に開かれた「古事類苑編纂終了式」の記録として作られた『古事類苑編

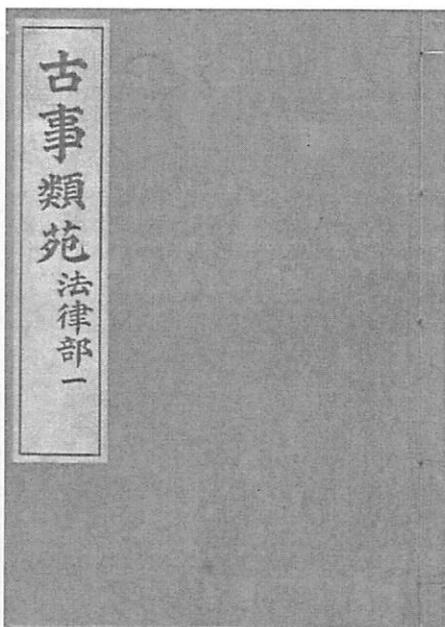


[2]和装本『古事類苑』の帙袋

纂始末」(神宮司庁蔵版の配り物,刊年不明[編纂終了式の翌年1908年(明治41)頃か]を下敷きとしてまとめられた記録だが、それに記された合計によりますと18万8790円36銭とある[4]。

この金額を今の物価に換算して考えてみよう。正確を期することは難しいが、たとえば、分かりやすい所では、夏目漱石(1867-1916)『坊ちゃん』(1906年[明治39]発表)も参考になるだろう。そこには、次のようにある。

「卒業してから八日目に校長が呼びに来たから、何か用だろうと思って、出掛けて行ったら、四国辺のある中学校で数学の教師が入る。月給は四十円だが、行ってはどうだという相談である。おれは



[3]和装本『古事類苑』表紙

三年間学問はしたが実を云うと教師になる気も、田舎(いなか)へ行く考えも何もなかった。もっとも教師以外に何をしようと云うあてもなかったから、この相談を受けた時、行きましようそくせきと即席たたに返事をした。これも親譲りの無鉄砲がた崇たったのである。」

物理学校卒の経歴を持つ坊ちゃんの初任給は月給40円である。

ちなみに、漱石自身はどうかというと、彼は帝大卒で1896年(明治29)に松山中学校に月給80円で赴任している。当時の帝大卒を比較の対象にするわけにもいかないだろうから、平成における大卒教員初任給の相場を基準として、それを20万円と仮定しよう。すると、明治の物価を5,000~6,000倍すると、平成

の物価になるようである⁽¹⁾。となれば、記録に残る神宮司庁移管後の総経費は150,558円を現在に換算すると、約9億4400万円(6,742,500^{千円} € 程度[1€=140円で換算])になる。

これを莫大な大金と、思う人も多かろう。しかし、近年のコンピュータゲームソフトの開発費と比べるとどうだろう。たとえば、2005年時点のSONYの主力ゲーム機PS2(プレイステーション2)対応のソフトの開発費は、1本あたり3億~5億円かかるとのこと。

これが、次世代ゲーム機と呼ばれるXBox360では8億円~10億円に開発費がふくれあがると言われている。

こうした現代の消費型エンターテインメントと比べると、『古事類苑』編纂費用の7億5,000万円は、ゲームソフトの2本分ぐらいの開発費でまかなえる計算になるわけである。それで、歴史に残る不朽の大事業が完遂できるのだから、これはかえって安上がりな公共事業費と言えるのではあるまいか。

このこととあわせて、思い起こされるのが、類書などの集成事業が王朝始発の時に行われやすいということである。たとえば、次のような指摘もある。

国威の発揚には、対外的戦闘・国内の土木事業等々、その対象は種々有るが、それに伴う経済的疲弊と言うリアクションを考えた時、最も施工しやすいのが、書籍の編修及び整理校定と言う文化事業である——個々の編修事業を細部に亘って詳細に分析すれば、個々にその行為を惹起した独自の要因を持ってはいようが、巨視的に見た場合それとは別に、その行為が国威発揚と言う政治性を持っていたことは否定出来まい。故に歴代の王朝は国家成立と共に、書籍編修事業に必ず着手する。(○大東文化大学東洋研究所：編『芸文類聚(巻一)訓読 索引』(大東文化大学東洋研究所/1990.3.23)『芸文類聚』総説-2.『芸文類聚』編集の社会的背景」P6)

国威発揚と類書編纂とは、密接な関連があるというのだが、『古事類苑』も例外ではないようである。

第3節 なぜ編まれたか

次に『古事類苑』はなぜ編まれることになったかということを考えてい。

『古事類苑』には、その構想の発端にまつわる2つの説話がある。

一つ園遊会の折りに、蹴鞠の実演を見た外国人講師がその由来を質問したけれども、誰も答えられる人がいなかったという話。もう1つは、アメリカの前大統領グラント将軍(1

西暦	和暦	費用(円)
1895	明治28	8,488.912
1896	明治29	9,299.704
1897	明治30	10,078.634
1898	明治31	10,364.388
1899	明治32	10,650.467
1900	明治33	11,595.280
1901	明治34	11,976.303
1902	明治35	11,980.606
1903	明治36	13,017.829
1904	明治37	11,190.479
1905	明治38	12,374.440
1906	明治39	13,227.584
1907	明治40	18,295.294
1908	明治41	5,051.270
1909	明治42	5,660.738
1910	明治43	5,184.914
1911	明治44	5,637.044
1912	大正元	6,797.840
1913	大正2	7,919.010
合計		188,790.736
[4]神宮司庁移管後の『古事類苑』編纂支払費(除出版費)		

(1) <http://www1.u-netsurf.ne.jp/~sirakawa/index.html> (コインの散歩道2005.3.5参照)

8代大統領,1869-1877) 来日時に能楽が演奏された際、その由来を問われても、誰も回答できなかったという話である。

真偽の程は定かではないが、両話の枠組みはよく似ている。すなわち、欧米には百科全書という便利なものがあって、物事の由来を問うような質問に即答できるのに、日本にはそれがないと、外国人に指摘され、当時の日本人は随分恥ずかしい思いをしたということである。

自分の国の文化をないがしろにしているということを外国人から指摘され、改めてそのことを自覚するに至ることは、現代に至るまで繰り返されていることで、日本人の特質といえるものかもしれない。

しかしながら、グラント将軍の来日は1879年(明治12)7月のことで、これは、文部省編輯局長大書記官西村茂樹(1808-1902)による「古事類苑編輯ノ儀伺」が1879年(明治12)3月8日に出された4カ月後であることが判明しているため、その話を本当のこととするのは無理である。当時、グラント将軍の来日は、相当の大事件であったようで、将軍を種とした小説に至るまで様々な書物が上梓されている。

自分の国の文化を知らないということを恥と自覚し、そのことを解決するための手段として、『古事類苑』編纂が企画されたという話にリアリティを増すために糊塗された挿話の真偽はさておき、こうした話が作られたことは、日本初の百科事典として『古事類苑』が編纂されたことが、当時の日本人にとっていかに画期的なこととされていたかということ象徴することとして受け止められよう。そして、この感覚は、現代のわれわれには持ち得ない感覚でもある。

「古事類苑編輯ノ儀伺」を出した西村茂樹は、佐倉藩士(千葉県佐倉市)の子として江戸に生まれた。安井息軒らに儒学を、佐久間象山らに洋学を学び、26歳から15年間、藩の要職にあたった。明治維新後は、文部省編集課長、編集局長として『古事類苑』の編纂に尽力する一方で、貴族院議員などをつとめ、その間、1873年(明治6)には明六社の創立に参加、機関誌「明六雑誌」に多くの論説を発表している。漢才と洋才を兼ね備えた、いわゆる「和魂洋才」を体現した人であったが、現在も社団法人日本弘道会という文部科学省所管の公益法人として、西村茂樹を会祖と仰いで研究活動が続けられている。

日本の百科事典編纂の機運は、その西村茂樹の建議により高まりを見せたのだが、その当時を考えてみよう。

『古事類苑』建議の2年前にあたる1877年(明治10)、約7カ月にも及んだ日本最大の内乱となった西南戦争が終わり告げた。これは、双方に6,000人以上の戦死者が出たのみならず、戦死者の数から言えば、官軍の方が実は被害が大きかった戦争であった。

また、翌1878年(明治11)には大久保利通暗殺事件が起きている。西村茂樹が『古事類苑』「古事類苑編輯ノ儀伺」を出して裁可されたのは、その翌年にのことであった。

このように、政治的にも戦後の財政立て直しに非常に困難な時代に直面していたところに企画された大事業が『古事類苑』の編纂事業であったわけである。

先にもふれたごとく、官撰の書籍編纂事業と整理校訂という文化事業は、中国においては、国家形成期における国威発揚のための諸種の事業の中で、国内の経済的疲弊というリアクションを考えた場合、最も施工しやすいものであった。

古来より、国威の発揚のためになされてきたことには、対外的戦闘・大土木事業、現代

ではオリンピック・博覧会などの国際的事業や宇宙開拓事業など、さまざまなものがある。しかし、それにともなう経済的疲弊と言うリアクションを考えた時、最も施行しやすいのが、書籍の編修及び整理校定と言う文化事業であったわけである。もちろん、個々の編修事業を細かく分析するならば、それぞれに独自の要因はあろうが、巨視的に見れば、かかる記念的行事やプロジェクトが国威発揚と言う政治性を持っていたことは否定出来まい。

第4節 『古事類苑』編纂建議当時の文化的状況

今度は視点を変えて、当時の文化状況という観点から『古事類苑』の成立を考えてみよう。

現在は、漢学・漢文学の名前を冠した大学の講座が消滅してから20年近くにもなろうとしているが、日本の学問史における漢学の最大の隆盛は、実は、享受・出版状況の活発さという視点で見ると1870年代後期(明治10年代)からほぼ10年にわたる期間がそれに相当していた。

そのことは、次のことからわかる([5]-1・2)。

漢学の初学入門書に、『千字文』(梁・周興嗣・撰)『蒙求』(唐・李翰・撰)がある。教授の階梯としては、まず、手習いとして『千字文』(周[周興嗣]系『千字文』)を習い、『孝経』『論語』などを素読し、ある程度漢文が読めるようになると中国故事集である『蒙求』注釈書(多くは宋の徐子光補注、日本の岡白駒箋注本)を習うといった段階を踏んで当時の教育は行われていたものだが、『千字文』(周[興嗣]系『千字文』)や『蒙求』注釈書の輩出状況を調べてみると、1875年(明治8)から1884年(明治17)頃にピークが現れていることがわかる。

その輩出のピークは、まず『千字文』のピークが現れ、続いて『蒙求』のピークが続く。『千字文』や『蒙求』の体裁に倣った異種・異系あるいは続撰本と呼ばれる一群の書物も、似たような現れ方をする。このことから分かることは、『古事類苑』の編纂の議が建議された1877年(明治10)から10年間ぐらいは、享受者レベルにおいても日本の漢学が隆盛であったことである。このことは、『古事類苑』が生み出された文化的基盤を考える上で重要である。

第5節 長期化する事業

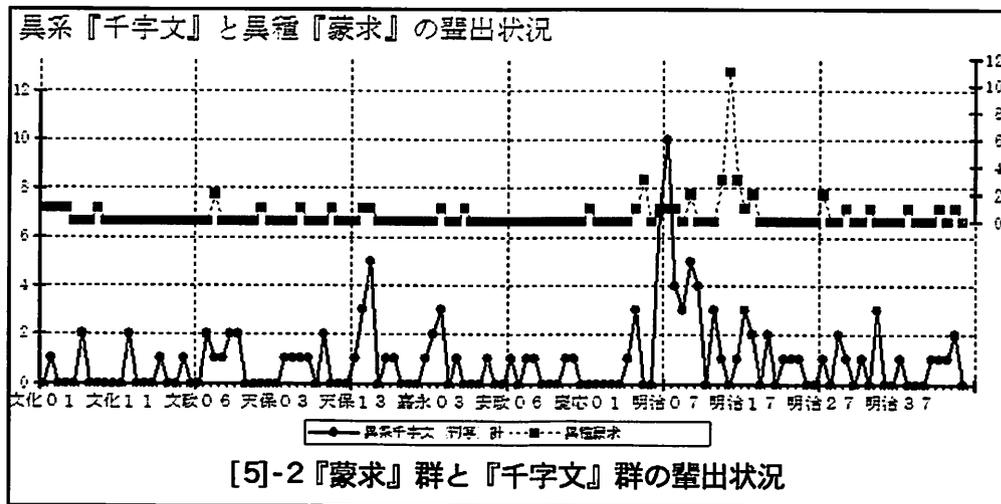
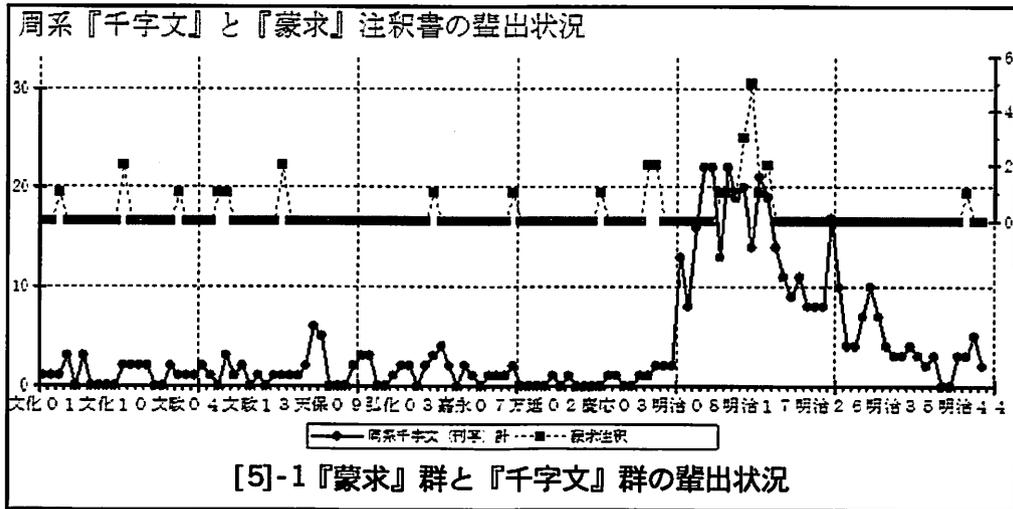
次に、『古事類苑』が目指したものについて考えてみたい。

西村茂樹による「古事類苑編輯ノ儀伺」の大意を採ると次の通りである。

まず、始めに、

「文運の拓けた国に、「類聚の書＝類書」(百科事典)は不可欠である。中国や西洋には、早くから類書が多数あって、今なお盛んに編まれている。しかるに、日本の文運は拓けたのは早いのだが、類書には乏しい。あるのは、『類聚国史』や『礼儀類典』のような、一分野に特化した分ものだけで、諸学全般に通用する総合的類書には欠けている。」

と語り出される。



類書として示された書名の中に、831年成立で1,000巻という大部な分量を誇った『秘府略』の存在はすでに知られてはいたものの、その名が挙がらないのは、同書が国書を使用しないで、中国典籍からの抄出だけで成り立っていたからであろう。しかも、現存が2巻の零本しか存在しないことも、その名が無視され理由と思われる。

続いて、

「類書編纂は、本来なら民間の著述に委ねるべきものではある。しかし、中国の類書のように大部なものは、国の力によらねば困難だろう。そこで、官撰による類書『古事類苑』の著述が望まれる。」

と述べ、続いて『古事類苑』の仕様が示される。

「予定巻数は300冊。時代は神代から徳川末代までを覆い、六国史以下諸書を博用、考証に有用ならば物語・詩歌も援用する。表記は原文のままとし、同事の重複することがあれば、国史律令の記載を採る。目録2巻を作り、一つは部門順、一つはイロハ順とする。引用に必要な書籍は、数千巻を要するも、浅草文庫（東京国立博物館の前身）・東京府書籍館（国会図書館の前身）の蔵書を使用することで経費を省いた。編集には3人、専任写字生1名ほか臨時数名があたり、編集に10年、彫刻・印刷で5年、都合15年による完成を予定する。」

計画当初から「引用に必要な書籍」が数千巻を必要するものの、それを整えての編纂作業であるならば裁可は下りなかったであろう。浅草文庫(東京国立博物館)、東京図書館(国会図書館の前身)の蔵書を使用することで経費の節減につとめることで、経費の節減をはかるという計画ではあったのだが、結局は画餅に終わった。また、それと同時に、『古事類苑』の引用書がいかなる所に由来するかについて、一考を要する記述である。

官撰という形で始まった『古事類苑』の編纂事業は、その専門性が深まるにつれ、文部省内ではまかないきれなくなり、外部委託、今流で言えばアウトソーシングが行われることになった。

予定された巻数300冊(和装)は、完成時には350冊に膨らみ、編集3人、専任写生字1名ほか臨時数名という作業スタッフも、完成時の公式記録ともいえる神宮司庁編『古事類苑編纂始末』(刊年不明,無窮会図書館蔵)に記される、編修及関係諸員として名の挙がった人を数えても、

- 1879年(明治12)3月以降：文部省編纂時代……15名
- 1886年(明治19)12月以降：東京学士会院監督時代(編纂は文部省内で継続)……10名
- 1890年(明治23)4月以降：皇典講究所時代……35名(含文部大臣)
- 1895年(明治28)4月以降：神宮司庁時代……45名(含内務大臣・文部大臣)

と、どんどん膨らんでいる。名前の一覧には内務大臣とか文部大臣まで入っていることからわかるように、大仰な企画になって行ったわけである。

しかし、公式記録に名前が挙がるは、一部の人にとどまるだろう。たとえば、現代においては印刷技術史にその名が銘記されるべきであろう人々の名前は漏れ、編集作業においても、実際にはさらに大勢の人が関与していたと予想される。編集10年、印刷5年で計15年という当初計画は、編纂式終了までで29年、索引完成までには35年もかかった労苦は察するに余りある。

第6節 目標「三大千」

中国においては、皇帝のために作られた「欽定」の書物は、日本で言うところの「勅撰」に相当し、古来数多くのものが作られてきた。

その中に「三大千」と呼ばれるものがある。『冊府元龜』(宋真宗勅命・王欽若等撰)『文苑英華』(宋太宗勅命・李昉等撰)『全唐文』(清仁宗勅命・董誥等撰)がそれで、いずれも1,000巻ある所から名づけられたものである。『古事類苑』がこの巻数で整えられるに至ったことには、中国への対抗意識が働いたものと推察されようが、文字の大きさを考えれば、『古事類苑』は近代的な金属活字で作られていることもあって、中国の「三大千」を優に超える規模になる⁽²⁾。その意味において、「本邦ノ文運ハ早く開ケタケレドモ、類聚ノ書ハ至テ乏シ」いとまで嘆じた自己認識を恢復させるに十分なものであったといえる。

しかしながら、中国には『永樂大典』(明永樂帝勅、解縉・姚広孝等撰、原巻22,877巻、現存797巻)や『古今圖書集成』(清康熙帝勅・陳夢雷等撰、清雍正帝勅・蔣廷錫等増訂、

(2) 滝川政次郎「佐藤博士の律令学」三 明治文化と『古事類苑』編纂の方針(『佐藤誠実博士律令格式論集』、律令研究会出版・汲古書院発行,1991.3)

10,000巻)などの巨大な百科事典もあった。『古事類苑』は、それに比べると量の点では少しく遜色はあるかもしれないだろう。しかし、『古事類苑』の編纂過程を見ると、後述のごとく当初40部門であった部立を整理統合して3/4の30部門へと簡素化が図られている。しかも、「靈異」部に至っては、近代社会にそぐわぬ配慮からか、「罔両」部と名を変じて成稿段階にあったにもかかわらず捨て去られた⁽³⁾。このことは、『古事類苑』が目指した集成作業が、決して無定見なものではなかったことの一証左となっている。

第7節 見本版『古事類苑』の発見

現在知られている『古事類苑』の刊行状況は以下の通りである。

『古事類苑 索引・総目録』(1914年 [大正3] 8月29日発行)

初版：1896年(明治29)より刊行 [神宮司庁蔵版]

再版：1927年(昭和2)より刊行 [神宮司庁蔵版]

三版：[縮刷普及版] 1931年(昭和6)より刊行 [吉川弘文館]

四版：1967年(昭和42)より刊行 [吉川弘文館]

五版：1976年(昭和51)より刊行 [吉川弘文館]

六版：1995年(平成7) [吉川弘文館]

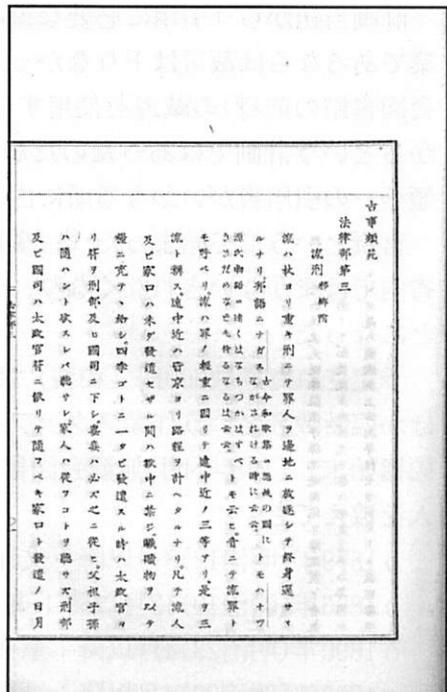
ところが、このほかに、見本版『古事類苑』とでも呼称するべきものが見つかった。

前ページに掲示する写真[6]がそれである。現行の『古事類苑』(写真[7])と比べると印象はずいぶんと異なるのは、見本版『古事類苑』が木活字で組まれているためである。

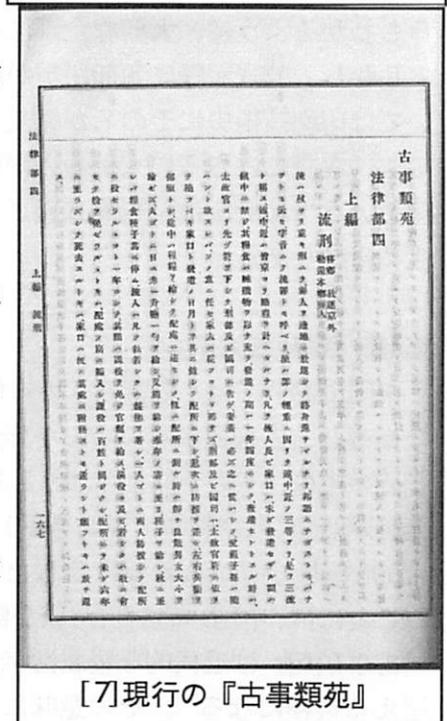
これを見本版と呼ぶこととした理由は、その題籤(写真[8])が「古事類苑法律部一 見本」となっており、「見本」の所は赤いスタンプが押されていることによる。

見本版『古事類苑』に、成立を伝える情報は残されていないが、それが作られたのはいつ頃だったのであろうか。

そのことを推察しうる資料として、『古事類苑』の印刷が初めて行われた時期についての、『古事類苑』総目録・索引所収「古事類苑編纂事歴」12頁の次の記事がある。



[6]見本版『古事類苑』



[7]現行の『古事類苑』

(3)注(2)に同じ。



斯クテ明治二十九年ニ至リ、助修石井小太郎、佐野久成、熊谷直一郎、山本信哉ノ四氏、帝王部二十七卷ヲ編成ス、乃チ佐藤編修、松本副編修ノ検閲ヲ経テ活刷ニ付シ、十一月八日之ヲ発行ス、是ヲ古事類苑刊行ノ嚆矢ト為ス、

これによれば、1800年(明治29)が”公式”の刊行開始というのである。

しかし、このように見本版『古事類苑』目の前にすると、「是ヲ古事類苑刊行ノ嚆矢ト為ス、」という、やや持って回った表現となった理由も、見本版の存在があつてのことと考えると腑に落ちてくるのである。

見本版『古事類苑』は(財)無窮会の神習文庫の所蔵にかかり、その略書誌は以下の通りである。

〔書名〕古事類苑法律部(見本)

〔所蔵〕無窮会図書館神習文庫・三七五〇号

〔冊数・存否〕三卷三冊全

〔大きさ〕縦26・3cm×横18・6cm

〔外題〕古事類苑〈法律部一(～三)〉見本(朱)

〔外題体裁〕簽/刷/原/左/単

〔題簽寸法(郭内)〕縦17・5cm×横2・9cm

〔表紙体裁〕原/色:朽葉色/模様:無地

〔丁数〕第一冊・56丁/第二冊・44丁/第三冊52丁(計162丁)

〔扉〕無/〔序〕無/〔奥書・刊記〕無

管杖始見
〔日本書紀〕廿五
大化二年三月辛巳詔
夫。及國造伴造并諸百姓等咸可聽之。

[9]校正箇所

〔柱記事〕「古事類苑 〓 法律部一(～三) 〇一(～〇五十六終・〇四十四終・〇五十二)」

〔料紙〕楮

〔郭枠〕郭内寸法:縦18・5cm×横14・1cm/一面行数:13行/一行字数:26字(一面字数340字平均[見込])

〔保存状態〕良/落丁:無

〔作成情報〕奥書|識語|刊記:無

〔書入〕有/朱/位置:法律部二第二丁「徳孝」を修正/書入者:井上頼国

この見本版には、書き入れがある。(写真[9])に示したように、『日本書紀』からの引用だが、「廿五徳孝」は「孝徳」とあるべき所なので、それを直すようにとの指示が入っているのである。この指示は、井上頼国の手によるもので、本書がまだ校正途中のものであったことがわかる。

さらに興味深いことには、写真[10]右に示した部分に見える、

「僧尼犯ノ事ハ同ジク釈教部ニ収メタリ」

という記述である。これは現行の『古事類苑』の部立には存在しないもので、後考で示すように、1890年(明治39)に36部門から30部門へと部立が再編された際に、宗教部へと統合されて消滅した部立である。つまり、現在の部立と異なる構成を持った段階で「見本出版」が企画されたことが、この記事から分かるわけである。

そのことと考え合わせて、本書の成立を考えるのに参考となるものに、次のような記事がある。

三月九日、一、午後三時ヨリ川田検閲長ノ邸ニ於テ検閲員臨時会ヲ開キ、
古事類苑見本出版ニ関スル検閲長意見書ノ条件等ヲ議シ、且、門ヲ改メテ部ト
為スコトス、当日出席者左ノ如シ、(1891年[明治24]3月9日、「従明治二十三年ノ至同二十六年古事類苑記録」)

現在の部立と異なる構成を持った段階で「見本版の出版」が企画されたことが、この記事から分かるのである。よって、『見本版古事類苑』の成立時期は、この「見本版」の企画が議題に上った1891年(明治24)からそう遠くない時期と考えて差し支えないだろう。

見本版『古事類苑』が作られたのは、他にもあった可能性は高いが、残念ながら現在の所、「法律部」の和装本3冊しか見つかっていない。

本書が出された背景には、予算獲得のためのデモンストレーションの意味もあったかと考えられる。何しろ、前年4月には皇典講究所へ事業の移管がなされ、その後の資金斡旋の苦難を経て1895年(明治28)に神宮司庁へと編纂事業は転々とすることになるのである。

『古事類苑』第1冊目の印刷は、神宮司庁の翌年1896(明治29)にようやく始まるのだが、見本版の作成から本格的印刷の開始までのおよそ5年の間に、『古事類苑』の内容は大きく変貌を遂げていることがわかる。何しろ、見本版法律部は和装本で3冊しかなかったものが、現行活字版法律部は15冊へと5倍以上も膨らむほどの内容の充実ぶりを見せているのである。

しかし、その一方で、品質という点では、大量印刷を前提とするものとなったためか、版面、とりわれ図版の鮮やかさという点で、見本版の絵が活字版以上の出来になっているということは否めない([11][12])。

こうした大きな変化が、『古事類苑』編纂作業の最終段階で起きていることを考えると、『古事類苑』の編集作業の追い込みは相当に大変なものだったと推察されるのである。

第8節 『古事類苑』のオントロジ

さて、本発表のタイトルにも使用される言葉、「(『古事類苑』の)オントロジ」について考えたい。

「オントロジ」という言葉は、近年ずいぶんと一般的になってきたとはいえ、その用語の普及は一部の専門分野にとどまる。と同時に、それぞれの分野での認識に多少の差異が

ナリ。此ノ如キ者ハ皆疑ヲ関キテ強ヒテ之ガ説ヲ爲サズ。猶法律
ニ屬スベキ者ノ此部ニ載セザルアリ。即チ榊戸ニハ或ハ移齋ノ
如キ者モアレドモ之ヲ塚榊ニ屬シ。放生禁殺生ハ教旨ノ類ナレ
ドモ釋教部ニ收メ。管尾犯ノ事ハ同ジク釋教部ニ收メタリ。

[10]残存する「釈教部」の記述

(4)1891年[明治24]三月九日、古事類苑編纂史話(18) 文部省・皇典講究所における編纂関係資料(八) (表紙外題)「従明治二十三年ノ至同二十六年 古事類苑記録」(古事類苑月報45、1970(昭和45)12月所収)

あるのが現状である。そこで、本稿における立場を明確にするため、簡単にその定義にふれておこう。

オントロジ[Ontology]とは、哲学の「存在論」に由来する言葉である。Ontとは古代ギリシア語で「存在」を意味する「エイミ」の能動態現在分詞中性形で、英語のbeingに相当する語幹を示す。それに「論」を示す言葉の「ロジ」が結合した所から生まれたものである。

「存在」とは、哲学では、「存在としてのモノ」、つまり「モノ」そのものをさす。つまり「オントロジ」とは、「モノとしての性質」を研究する学問を呼ぶものとして使われた言葉で、「存在」自体の意味を問う哲学であった。

ところが、それが世界の根源的要素を「物質、エネルギー、情報」の3要素に還元して考える⁽⁵⁾ことを学是とする情報学で使われるようになってくると、それを表現するためのデータとして「オントロジ」が実体を持つようになる。

たとえば、概念体系を表すものとして、あるいはあるものとあるものとを結びつける手順や規則の集合体、またはそれを成り立たせるルールを呼称するものとしてなどのように、「オントロジ」と名づけられる対象は、次第に広がりつつあるのである。

日本文学や史学など、伝統的な人文学研究の分野では、「知識概念木」としてのオントロジというが頻用されることになるのであろうが、それと類似する概念に、「シソーラス」という考え方がある。しかし、「オントロジ」が「シソーラス」と大きく異なる点は、オントロジは、あるがままの知識体系を尊重して、それをなるべく忠実に記述しようとする態度を貫こうとしていることである。シソーラスのような、全体を1つのものにまとめ上げ、統御しようとする方向とは対極にある点で、オントロジは「内容指向性」を持つものとも言われる⁽⁶⁾。



[11]見本版の図版(1頁分)



[12]現行活字版の図版(1頁分)

(5)ノーバート・ウィーナー『サイバネティックス第二版』『人間機械論』など。

(6)溝口理一郎「オントロジー工学の試み」(1998年度人工知能学会全国大会(第12回)AIレクチャ)、『オントロジー工学』(人工知能学会編、オーム社、2005.1.20)

「オントロジ」提唱に際して先駆的立場にある一人、溝口理一郎の定義⁽⁷⁾によれば、オントロジは以下の構成物からなるとする。すなわち、

- (1)オントロジーの本質である、対象世界から基本概念を切り出し(articulation)た結果としての「概念」の習合
- (2)概念のis-a関係(上位・下位関係)による階層化
- (3)is-a関係以外で必要となる概念観の関係
- (4)抽出した概念と関係の定義、あるいは意味制約の公理化

オントロジの本質は初め二つ(1)(2)にかかり、以下は本質的というよりは、対象とするタスクなどのオントロジを利用する目的に依存する関係が重視され、内容性の厳密な定義が求められる。

和漢古典においては、何度も編纂された類概念(分類概念語彙)によってまとめられた辞典や辞書というものが古来多数作られてきた。しかも、それらがきわめて継承性の高いオントロジの宝庫となっているという特色がある。その場合のオントロジとは、類書の部立などによって表現された、それぞれの分野に特化された知識体系のことをさす。そしてそれは、分類概念用の語彙と、それがどの階層に属するものかという階層関係によって表現される。こうした形で表現されるオントロジは、「単純オントロジ」とも呼ばれるが、和漢の古典学においては、こうした「単純オントロジ」がふんだんに使用され、作られてきた長い歴史があるとも言えることができるのである。

第9節 中国型類書か西洋型百科事典か—『古事類苑』の特徴—

前近代における「日本の知」が集大成されているという点で、その内容を部門別に、さまざまな語彙で分類された『古事類苑』は、「オントロジ」の宝庫として貴重である。では、辞書・辞典としての『古事類苑』には、どういった特色があるのだろうか。今度は、その体裁から考えてみたい。

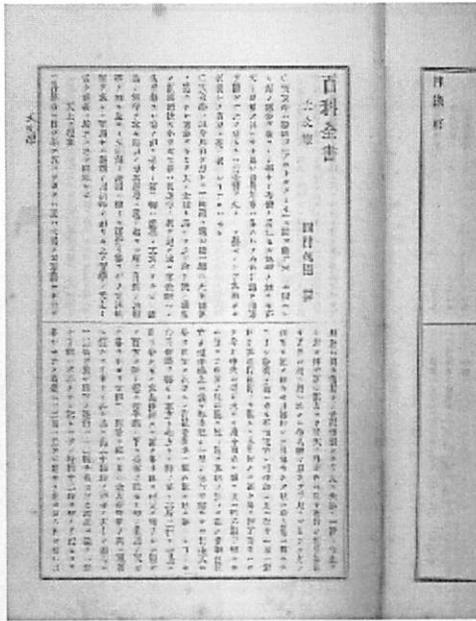
西村茂樹の「古事類苑編輯ノ儀伺」が、「文運の開けた国に類聚の書は不可欠である」といった趣旨の言い回しから始まるとは先述の通りである。「類聚の書」というのは、中国で言う所の「類書」と、西洋における「百科事典」を意識した言葉に他ならない。

では、『古事類苑』は中国型類書と西洋型百科事典のどちらを志向したものとなっているのであろうか。このことについて考えたい。

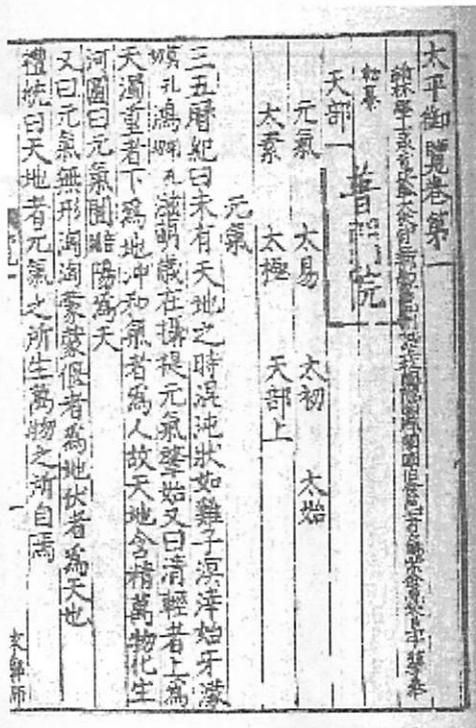
西洋型百科辞典の形態を、ABCのアルファベット排列の辞典と考えている人は少なくない。しかし、これは大きな誤解で、ABC排列のように、排列規則を何か特定の有限個の集合に準拠させる方法は、歴史的にも比較的新しい手法であった。

たとえば、十七世紀の辞書のほとんどではIとJ、UとVが区別されておらず、全体と

(7)溝口理一郎『オントロジー工学』1-3 オントロジーの構成的定義(人工知能学会編、オーム社、2005.1.20)



[13]西村茂樹：訳『百科全書』



[14]玄昉等奉勅撰『太平御覽』

して十七世紀の辞書は見出し語の配列の誤りが平均8パーセントもあったという⁽⁸⁾。つまり、識字層においても、こうした排列規則に習熟した人たちはごく限られた存在だったのである。

辞書を使う前に、まず排列規則に習熟しなければならないということは、文字の順番、どの文字がどこに位置するかを、完全にそらで言えるようになることである。そして、そのためには、その配列規則が社会的・文化的に共有されたものとなっていることが必要になる。このことは、アイウエオ順やイロハ順など、言語体系を異にするさまざまな地域においても同様である。

また、言葉をアルファベット順に並べることは、関連ある情報が様々な場所に分散してしまい、主題が集約されずに断片に分かれてしまう。これは、知識の体系化と秩序の統一を指向することとは対照的といえる。

つまり、そうした事情によって、「古事類苑編輯ノ儀伺」で意識された所の西洋型百科事典は、中国類書と同様、分野別つまり、カテゴリー型で構成されていたと考えるべきであろう。

では、『古事類苑』編纂の議が立ち上がった当時の、中国類書と西洋型百科事典の差はどこにあったのだろうか。

[13]の写真は、『古事類苑』編纂を建議した西村茂樹の訳による『百科全書』[丸屋善七(丸善)] / 原著「インフォールメーション、ゼ、ピープル」(information the people)の冒頭である。

対して[14]が『古事類苑』の部立の参考資料の一つにもなった代表的欽定類書の一つ『太平御覽』の冒頭である。

西洋型百科事典は、解題解説の論文で記述されているのに対して、中国類書では、関連する部分を引用し、それを列挙する形で構成されている。これを鈔撮文しょうさつぶんと呼ぶのだが、「総載」などと呼ばれる始めの総説でも、中国類書は基本的にこうしたスタイルで全体が貫かれて

(8) ジョナサン・グリーン (Jonathon Green) 著、三川基好：訳『辞書の世界史 (DICTIONARY-MAKERS AND THE DICTIONARIES THEY MADE)』(朝日新聞社 / 1999.9.5)

いる。

これらを、[15][16]に示す『古事類苑』の体裁と比べてみよう。

すると、『古事類苑』は、右上段15]に示すように、各部冒頭は解題解説の論文で始まり、続いて左のように綱領と呼ばれる見出しの下に、出典と引用・鈔撮文が列挙される体裁となっていることが見て取れよう。すなわち、『古事類苑』は、解題解説の論文で構成される西洋型百科辞典と、鈔撮文で構成される中国類書の体裁との折衷型といえるのである。

第10節 『古事類苑』の世界観

およそ類書の構成には、編纂当時の中国の世界観が現れているといわれるが、『古事類苑』も例外ではない。

『古事類苑』編輯の当初、その「部立」の参考にされたものは、西村茂樹の「古事類苑編輯ノ儀伺」に、

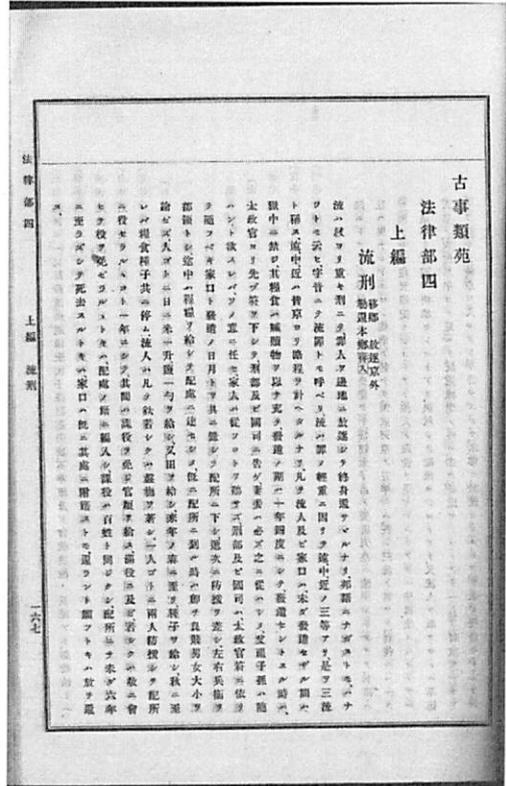
第三 部門ノ分チ方ハ、太平御覽・淵鑑類函・和漢三才図会ノ三書ヲ折衷シテ之ヲ定ム。

と明示されるように、中国宋代の『太平御覧』と清代の『淵鑑類函』、そして日本の江戸期の『和漢三才図会』であった⁽⁹⁾。

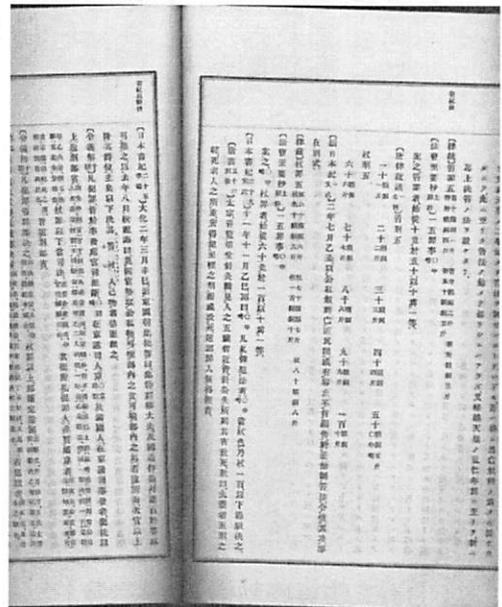
『古事類苑』が完成時した際には分類用見出しは約42,000件にも上ったが、その分類項目（綱領）の内訳と配列には、清代の康熙帝が編纂を命じた『淵鑑類函』と、『和漢三才図会』の影響が大きかったことがわかる。

「国学の精華」たる『古事類苑』から示される世界観は、今の我々から見ると、『古事類苑』が国史律令を第一典拠としていることも与ってか、ずいぶん中国的な印象を受ける。

中国類書には、その当時の世界観と宇宙観が反映されているとよく言われるが、それは大きく2系統に分かる。1つは、儒教的世界観に



[15]『古事類苑』各部冒頭



[16]『古事類苑』鈔撮文揭示部

(9) 『古事類苑』の分類用見出しには、各書に示された「綱領」と、目次、五十音索引の3種がある。総数においてはほぼ一致するが、厳密な総数を求めると必ずしも一致はしないことが、本書のデータベースを構築する過程で判明した。

よるもの。これは梁の『華林遍略』などの流れを汲んで、『修文殿御覧』『芸文類聚』『太平御覧』などへの系譜につながる。『古事類苑』も『太平御覧』を部立の参考に行っているといえるため、同じ系譜に立つものと言えよう。

もう1つは、仏教的世界観に立つもので、『経律異相』（[梁]釈宝唱等撰）や、『法苑珠林』（[唐]道世）などがある。『古事類苑』は、その内の片方、つまり儒教的世界観の系譜に立つ。

中国では類書は、欽定なるものが多かったことから、おのづからその知の象徴と権威は、第一等のものと目されるようになっていた。そして、おのおのの類書における「知の体系」、すなわち世界観は、まず「目録」に現れる。

『古事類苑』の索引には、主題別に論理的配列がなされた索引、つまり現代で言うところの目次・目録型索引（中国の古典類書では目次や目録も索引と呼ばれる）と、あいうえお順の索引の二種類が作られている。

[18]に示したものは、早川聞多氏の作成になる中国の『太平御覧』『淵鑑類函』と『古事類苑』の部立の比較表に、『和漢三才図会』を取り合わせたものである。

比較表を見ると、『太平御覧』『淵鑑類函』がきちんと「部」でまとまっているのに対して、『和漢三才図会』の上位下位の概念体系は、必ずしも行儀のいいものとはいえない。「部」や「類」といったものがきちんと巻々の冒頭に階層的に整合されて配列されていないため、厳密な比較が出来ないためである。

どうやら日本人は、中国人や西洋人のように、上から下まできっちりと秩序だった体系を立てて統一的な世界観を作り上げることが苦手だったと言えるのかも知れない。

そのために、どうしても漢籍の枠組みを借りざるを得なかったのだろう。しかし、『和漢三才図会』の分類項目の体系がそのような事情であるものの、部立名として継承された分類用概念語彙を比較してみると、『古事類苑』によって示された「日本の知の体系」の大枠が、『太平御覧』『淵鑑類函』に近いことは見て取れよう。

ただし、『和漢三才図会』の綱領に使われる語彙には、『古事類苑』へ受け継がれて使用されるものも少なくない。

いずれにしても、前近代における「日本の知の体系」の集大成たる、あるいは当時のものいいを借りるならば、「国学の精華」たる『古事類苑』が示した世界観は、現在の私たちにとっては、中国的なものに受け止められるわけです。これは、現代と古典時代の学問とが根本的に異なる点でもある。

では、江戸期以前の「日本の知」は、どのように認識されていたのであろうか。



[17] 寺島良安『和漢三才図会』
(1713[正徳3]刊)

太平御覧	淵鑑類函	古事類苑(当初)	和漢三才図会
天部	天部	天部	天部
時序部	歲時部	歲時部	天文
地部	地部	地部	天象類
皇王部	帝王部	水火部	天象
偏霸部	后妃部	神災部	時候類
皇親部	儲官部	神祇部	時候
州部	帝戚部	帝王部	曆占類
居処部	設官部	朝儀部	曆占
職官部	封爵部	官爵部	人倫類
兵部	政府部	政治部	官位部
人事部	礼儀部	封禪部	人倫之用
逸民部	深部	法律部	權衡部
宗親部	文学部	外交部	文体部
薬部	武功部	文学部	異國人物
文部	刃産部	方技部	外夷人物
学部	工部	漢舞部	技藝
治道部	器械部	鼓技部	藝能
刑法部	道部	兵部	婦儀部
秩部	巫異部	形体部	巫器類
儀式部	方術部	性情部	神祭付仏供器
服装部	巧藝部	雜部	兵器類
服用部	京色部	人品部	兵器
方術部	州部	姓名部	刑罰
疾病部	居処部	人部	漁獵具
工器部	産業部	礼式部	百工具
器物部	火部	産業部	容飾具
雜物部	珍宝物	祝教部	服玩具
舟部	布帛部	習異部	絹布衣服類
車部	儀飾部	遊戯部	絹布類
華僂部	服飾部	居処部	衣服類
四夷部	器物部	舟貨部	冠帽類
珍宝物	舟部	布帛部	履襪類
布帛部	食物部	冠服部	履廚具
資産部	五穀部	器用部	家飾具
百穀部	菜部	符量部	車駕類
飲食部	菓部	舟車部	船・橋類
火部	花部	食物部	爲耳類
休歇部	草部	動物部	女工具
儀飾部	鳥部	植物部	畜類
神鬼部	木部	金石部	獸類
妖異部	獸部		鼠類
獸部	鱗介部		鹿・雉類
羽旗部	虫部		禽部
鱗介部			龜蛇部
虫部			介甲部
木部			介貝部
竹部			魚部
果部			虫部
菜部			地部
香部			金石部
茶部			地誌部
百卉部			家宅類
			家宅の用
			木部
			果部
			豆類
			山豆類
			秀豆類
			濕豆類
			毒豆類
			粟豆類
			水豆類
			藻類
			苔類
			石豆類
			菴豆類
			菴菜類
			芝栝類
			菜滑菜
			穀類
			穀類
			穀豆類
			穀を食べなくても飢えない法
			漬醃類

【18】『太平御覧』『淵鑑類函』『和漢三才図会』と『古事類苑』の比較

たとえば村田春海『和学大概』（『続々群書類従』10所収）の冒頭は、

「和学といふ事にしへは一家の学ならず、皆儒生の兼ね通じたりしことなり」

という書き出しで始まる。和学、つまり国文の学は、大学のような国家機関で学ぶべきものではなかった。そのため、国学や和学を学ぶ当事者は別として、他の分野の人々からは、古来、漢学の余技的存在と見なされて来たわけである。

それが今や、国文学研究資料館という（元）国立の研究組織が立ち上がる一方で、漢学研究所は、1990年初頭に日本学術会議から設立の勧告が出されてもなお、実現しないままにしているという次第である。

前近代の学問の枠組みが基本的に「漢」寄りであったことは、そのほかにも、和学の文献が集成された『群書類従』においては、7割が漢文あるいは漢文脈の文献で占められるということも傍証として挙げられよう。各作品の序文ともなると、圧倒的に漢文の序文が多いため、さらに多数のものが析出されることであろう。

また、日本人の著録になる古典籍の総カタログとして、『国書総合目録』は著名だが、前近代において、日本人が実際に目にふれてきた古典籍の総量となると、そこに収載される書物およそ20万件だけでは収まらない。国書のほかに漢籍、和刻本、仏書なども多く流通していたのである。

馬淵和夫氏の談⁽¹⁰⁾によれば、醍醐寺や東寺などの寺院に残される典籍の調査を長年続けた経験上では、日本の前近代で流通していた古典籍の9割は漢文ではなかったかとのこと。現代の状況を思うにつけ、隔世の観を禁じ得ない。

第11節. 部立の変遷

さて、『古事類苑』は、「日本の知」を集大成するものと企画されたわけだが、その骨組みともいえる部立は「漢」の枠組みによって設計された。ただし、その構成は部分的には何度かの改変を受けている。

『古事類苑』の大分類は、およそ次のような変遷をたどってきた。

40(門)(1879年[明治12])→39(門)(1885年[明治18])→36部(1895年[明治28])→30部(1906年[明治39])→30部(1911年[明治44])

また、その詳細は、[19]の表で示す通りである。

まず、編纂当初の部立は、現在のような「部」ではなく、「門」で立てられていたようである。それが「部」となりましたのは、1885年(明治18)の段階で、その数も、40門から39部へ、さらに36部、30部と、次第に整理されている⁽¹¹⁾。

(10)馬淵和夫「日本文学史はこれでいいか」(鶴見大学国語教育研究会講演会、2002.10.12、於：鶴見大学)

(11)1891年(明治24)3月9日条、「古事類苑編纂史話(18) 文部省・皇典講究所における編纂関係資料〈八〉(表紙外題)「從明治二十三年ノ至々二十六年 古事類苑記録」(古事類苑月報45、昭45年12月所収)「三月九日、一、午後三時ヨリ川田検閲長ノ邸ニ於テ検閲員臨時会ヲ開キ、古事類苑見本出版ニ関スル検閲長意見書ノ条件等ヲ議シ、且、門ヲ改メテ部ト為スコトトス、」

西暦	1878	1885	1890	1896	1907
和暦	明治12	明治18	明治23	明治29	明治40
部門	40部門立項	39部門	36部門	30部門	30部門
特記事項		官制改革により一時中断	文部省から皇典講究所へ移管		
No		8部門92冊整理	11部門234冊整理		一部名称・配列変更
1	天	天	天	天	天
2	歳時	歳時	歳時	歳時	歳時
3	地	地	地	地	地
4	水火	水火
5	祥災	祥災
6	神祇	神祇	神祇	神祇	神祇
7	帝王	帝王	帝王	帝王	帝王
8	朝儀	朝儀
9	官爵	官位	官位	官位	官位
10	政治	政治	政治	封録	封録
11	封録	封録	封録	政治	政治
12	法律	法律	法律	法律	法律
13	外交	外交	外交
14	文学	文学	文学	泉貨	泉貨
15	方技	方技	方技	称量	称量
16	楽舞	楽舞	楽舞	外交	外交
17	武技	武技	武技	兵事	兵事
18	兵事	兵事	兵事	武技	武技
19	形体	形体	形体	文学	方技
20	性情	礼式	宗教(併耶蘇教)
21	親戚	親戚	親戚	楽舞	文学
22	人品	人品	人品	方技	礼式
23	姓名	姓名	姓名	宗教(併耶蘇教)	楽舞
24	人事	人事	人事	人事	人
25	礼式	礼式	礼式	姓名	姓名
26	産業	産業	産業	産業	産業
27	釈教	釈教	釈教
28	靈具	靈具	靈具
29	遊戯	遊戯	遊戯
30	居処	居処	居処
31	泉貨	泉貨	泉貨
32	布帛	布帛	布帛
33	冠服	冠服	冠服	冠服	服飾
34	器用	器用	器用	食物	飲食
35	称量	称量	称量	居処	居処
36	舟車	舟車	舟車	器用	器用
37	食物	食物	食物	遊戯	遊戯
38	動物	動物	動物	動物	動物
39	植物	植物	植物	植物	植物
40	金石	金石	金石	金石	金石

[19] 『古事類苑』部立変遷図

[20]の表は、変化した部立の中から、特徴的な部分を抽出したものである。たとえば、歳時・水火・祥災といった各部立では、水火と祥災の一部が統合され、歳時部へと組み込まれている。そして、祥災の一部は、朝儀とともに政治部の中へ組み込まれて行っている。また、釈教

40部(1879年 [明治12])	39部(1885年 [明治18])	36部(1896年 [明治28])	30部(1906年 [明治39])
歳時門	歳時部	歳時部	歳時部
水火門	水火部		
祥災門	祥災部		
朝儀門	朝儀部		
政治門	政治部	政治部	政治部
神祇門	神祇部	神祇部	神祇部
方伎門	方伎部	方伎部	方伎部
釈教門	釈教部	宗教部(併耶蘇教)	宗教部
靈具門	靈具部		

[20]整理・統合される部立

・霊異をめぐる諸事項は、宗教へと統合されるとともに、霊異の一部分は方伎と合わさって行っている。

一方、神祇部はずっと初めから最後まで神祇のままに枠組みに変更がない。これは、神道は宗教ではないという認識に基づいているからである。

このように、分類の観点からものごとを眺めることによって、人間の思考の枠組みや文化の構造が見えてきて、興味深く重要なことが分かってくる。オントロジとは、こうした知識概念木のことをいい、それを情報化することによって活用するための基盤資源であるのである。

しかし、新たに意味性を付与されて広まりはじめた外来語である「オントロジ」という言葉を、既存の学術用語によって置き換えることは、すでに困難な状態にある。というのは、情報を処理するという行為を支える基盤資源としてのオントロジの重要性は、何もコンピュータに限ったことではなく、人間の文化的行為全てに関わってきているためである。そのようなものをコンピュータで処理できるような状態にすることは、何も情報学的な分野に関わるものではなく、逆に全ての分野の根本に関わることであるからである。その意味においても、『古事類苑』のデータベース化が果たされることには、大きな意義があると言えるだろう。

第12節 類書・辞書研究の根本問題

現在『古事類苑』のデータベース化を進めている。

2005年段階で電子化が果たされている部分は、目録・索引や天部のデータにしか過ぎないが、さらに続いて地部・歳時部も入力・校正作業が進行中である。

目録・索引・天部・地部・歳時部で、和装本換算で36冊というボリュームは、和装本全366冊全体から見ると約1割にしかすぎず、現段階は試行段階とでも位置づけるべき状態にある。しかし、それでも今後入力・電子化された成果を活用して研究を進めるために乗り越えなければならない重要な問題が幾つか発生している。

たとえば、データベースの構築というものは、ただ単に、必要な部分が探せて、それが見つかったことを喜ぶ段階では、やはり本当に研究に資すべきデータベースがデザインされたものとは言えます。研究の醍醐味は、どのような切り口でデータを作り上げ、それを分析し、そこから新たな発見を導き出すかにかかるといえる。そのためには、分析した結果や内容を、どうやって強調し、説明・明示するということが重要になる。分析結果や内容を説明するための手段に工夫が求められるのである。

しかし、『古事類苑』のデータ量は膨大である。そのため、データを全部入力し終えて、こういう特徴があるという段階にたどり着くことさえも至難のわざである。その過程のデータ量や作業量にも相当な工数を必要とする。しかも、すでに大量なデータ入れること自体が意義ある研究と目される時代は過去のものとなっており、その努力に対する評価ウエイトはきわめて低い。こうした問題は、辞書、類書を扱う研究分野に共通する問題となっており、それゆえにこそ、類書や辞書の研究は、その展開がきわめて緩慢にならざるを得ないのである。稿者が『古事類苑』データベースを構想した動機の一つには、実はこのように、辞書・類書研究を、実際にデータを作りながら進めることによって、研究全体を進展させようするという意図があったのである。

ックス)⁽¹²⁾のように、W3C 規格として勧告された XML1.0 との互換性に配慮された文書型定義ファイル(DTD)も策定されている(1999年9月)。

このように、CTS は次第に開かれた存在となりつつはあるものの、日本語組み版特有の規則を処理するために拡張された機能と仕様は、XML などの標準規格となったものに対して、今なおオーバースペックの状態にある⁽¹³⁾。

データベース化に際しては、このデータから HTML や XML などの汎用的フォーマットや、[22]に示すような、タグを簡略にしたテキストファイルフォーマットに落とし込まれ、そこからさらに目的に合わせた加工やデータの切り分け、付加作業が行われる。

[22]入力体裁 (『古事類苑』天部第1頁)

P 1

A 天部一

B 天

G 天ハアメ、又ソラト云ヒ、字音ニテテント云フ、又虚空ト稱ス、此篇ニハ天ニ關スル傳説、及ビ天上ヨリ異物ヲ降シ、空中ニ聲アルガ如キモノヲモ並載セリ、

C 名稱

V 類聚名義抄

N 四大

H <ruby><rb>天</rb><rt><M7f00-000b-1817></rt></ruby> <泰堅反ハルカナリ> <アメタカシ>

W 段注説文解字

M 一上一

X 天顛也、<此以【K二】同部疊韻【K一】爲【Kレ】訓也、凡門聞也、戸護也、尾微也、髮拔也、皆此例凡言元始也、天顛也、丕大也、吏治【Kレ】人者也、皆於【K二】六書【K一】爲【K二】轉注【K一】、而微有【K二】差別【K一】、元始可【Kレ】互【K二】言之【K一】、天顛不【Kレ】可【Kレ】倒【K二】言之【K一】、蓋求【Kレ】義則轉移皆是、舉【Kレ】物則定【Kレ】名難【Kレ】假、然其爲【K二】訓詁【K一】則一也、顛者人之頂也、以爲【K二】凡高之僞【K一】、始者女之初也、以爲【K二】凡起之僞【K一】、然則天亦可【Kレ】爲【K二】凡顛之僞【K一】、臣於【Kレ】君、子於【Kレ】父、妻於【Kレ】夫、民於【Kレ】食、皆曰【Kレ】天是也、>至高無【Kレ】上从【K二】一大【K一】、<至高無【Kレ】上、是其大無【Kレ】有【Kレ】二也、故从【K二】一大【K一】、於【K二】六書【K一】爲【K二】會意【K一】、凡會意合【K二】二字【K一】以成【Kレ】語、如【K二】一大【K一】、人言止【Kレ】戈皆是、他前切、十二部、>

W 爾雅註疏

M 五

(12)日本電子出版協会(JEPA)とJEPA出版データフォーマット標準化研究委員会が策定した、出版データフォーマット標準化交換フォーマット(<http://www.jepax.org/>)

(13)CTS データとデータベースデータとをつなぐコラボレーション—「古典人名・人物年表データベース」プロジェクトから—,相田満,PNC Annal Conference and Joint Meeting 2002-PNC/ECAI/IPSJ_SIGCH/EBTI-(人文科学とコンピュータシンポジウム 2002) 論文集 vol.2002.No.13,情報処理学会シンポジウムシリーズ/(情報処理学会)/PP129-136(8)

X 釋天第八、疏、〈河圖括地象云、易有【K二】太極【K一】、是生【K二】兩儀【K一】、兩儀未【Kレ】分、其氣混沌、清濁既分、伏者爲【Kレ】天、偃者爲【Kレ】地、釋名云、天顯也、在【Kレ】上高顯、又云天坦也、坦然高遠、說文云、天顯也、至高無【Kレ】上、從【K二】一大【K一】也、春秋說題辭云、天之言顯也、居【Kレ】高理【Kレ】下、爲【K二】人經紀【K一】、故其字一大以鎮【Kレ】之、此天之名義也、〉

V 古事記

N 下仁徳

H 此時、其夫速總別王到來之時、其妻女鳥王歌曰、
比ヒ婆ハ理波ハリハハハ、
阿ア米メ邁メ加メ氣メ流メニメカメケメルメ、
多タ迦カ由カ玖カ夜カタカクカヤカ、
波ハ夜カ夫カ佐カ和カ氣カハカヤカブカサカワカケカ、
佐サ邪カ岐カ登カ良カ佐カ泥カサカザカキカトカラカサカネカ、

V 神代直指抄

N 一

H あめつちといふは、本朝最初言語音聲のはじめにあめといひて、たかき義、ひろき義、たふとき義、のぼる義、四義そなはりて、陽道の義をあらはす、あめを彖といふ、彖は、開聲にて、う彖の義也、〈○中略〉のちに、雨をあめといふは、天よりふるゆへに、天のことばを、そのまゝかりていふ、

V 日本釋名

N 上天象

H 天地アメツチカ反カヘシ字は彖也、彖はひらくかな、陽也、つちの反字はち也、ちはとづるか

[22]の段階では、すでに外字に対してそれが対応する画像ファイル名を指定したデータを埋め込んである。

近年は、コンピュータで使用できる文字種も格段に増えてきており、本データにおいてもUCS3.0を念頭に置いた文字セットで構成されてはいるのだが、それでも不足する字のために外字を作成して、その画像を作成している。外字は、次に示す

〈M7f00-000b-1817〉

の形式で示され、このようにして作成された外字は、『古事類苑』の天部333頁で64字ほどある。これらはいずれもユニコード3.0レベルでは未登録の字で、内、今昔文字鏡番号を持たない字が30ある。

このような字が発生する理由は、『古事類苑』に字書が多く引用されることにより、親字や異体字が多用され、他の字形で代替させることが不可能なためである。中には[23]のように、文脈上、篆書の字形を示しておく必要のあるものもあるから厄介である。

JIS漢字に代表される情報交換用符号文字は、こうした取り組みを重ねてきて増えてきた。大規模漢字データベースの世界における漢字は、すでに紙の辞典をはるかに凌駕する文字数を扱うに至っているが、それぞれの文字が、ユニコードやUCSなどの世界共通規格となって一般化するに至



[23]篆書の外字



[24]作成外字例

るまでには、こうしたコンテンツから新たな文字を発掘し、登録し、周知させていくという地道な取り組みが繰り返されてきたからである。こうした営みは、さまざまなコンテンツ生成の現場で今後も継続される作業である。

先述の『古事類苑』のデータは、入力業者においては以下に示す入力手順書によって入力される。参考までに示しておく。

[24]『古事類苑』入力手順書

〔基本体裁〕

- A部名 CR
 B門名 CR
 C概説 CR
 D (または D Q S T) 付属文字 CR
 M 引用書名 CR
 N 編目位置 CR
 B 資料本文 CR
 W 参考資料 CR
 M 編目位置 CR
 X 資料本文 CR

E ページ

〔各項目仕様〕

- A 部名

各部の見出し部分

原稿通り入力し、先頭に Aを、最後に CRを入力。
- B 門名

各門の見出し部分。(部の見出しより下がった位置にある)

原稿通り入力し、先頭に Bを、最後に CRを入力。
- C 概説

門名に続く文章。

原稿通り入力し、先頭に Cを、最後に CRを入力。

見た目の改行は無視する。 CRを入力しない
- 付属文字

罫線の上にある語句。直下にある〔引用書名〕の前に入力する。

赤字で C D Q S Tのいずれかの指示があるので、対応するファンクション英字を先頭に入力してから、原稿通り入力。最後に CRを入力。複数の語句が同箇所にある時は、英字ファンクションを1つだけ入力してから、語句を/でつないで入力する。

5[V] 引用書名

罫線に付いてある、〔 ～ 〕で囲まれた部分の内、割注でない部分。
原稿通り入力し（〔 〕は不要）、先頭に[V]を、最後に[CR]を入力。

6[N] 編目位置（引用書名分）

罫線に付いてある、〔 ～ 〕で囲まれた部分の内、割注の部分。
右行→左行の順に原稿通り入力し、先頭に[N]を、最後に[CR]を入力。

7[H] 資料本文（引用書名分）

罫線に付いてある〔 ～ 〕で囲まれた部分の下から始まる文章。
原稿通り入力し、先頭に[H]を、最後に[CR]を入力。
見た目の改行は無視する。（[CR]を入力しない）

8[W] 参考資料

罫線より1字空きで始まる、〔 ～ 〕で囲まれた部分の内、割注でない部分。原稿通り入力し
（〔 〕は不要）、先頭に[W]を、最後に[CR]を入力。

9[M] 編目位置（参照資料分）

罫線より1字空きで始まる、〔 ～ 〕で囲まれた部分の下から始まる文章。
原稿通り入力し、先頭に[M]を、最後に[CR]を入力。

10[X] 資料本文（参照資料分）

罫線より1字空きで始まる、〔 ～ 〕で囲まれた部分の下から始まる文章。
原稿通り入力し、先頭に[X]を、最後に[CR]を入力。

11.P ページ

原稿の各ページの開始位置に入力する
資料本文の文章の途中であっても、その位置に入力する
先頭にPを付け、算用数字で入力し、最後にCRを付ける。

〔入力上の注意（全項目共通）〕

※文字・約物とも、縦組で入力。

※割注部分は、出現位置にく ～ 〉で囲ってベタ入力。（割注内改行は不要）
（割注内で行が変わっている時は、順番に注意）

※読点「、」は、そのまま入力する。文末にある時も、そのまま入力。

※返り点は、そのまま返り点を入力する。

返り点と読点と同じ文字の下に付いている時は、返り点→読点の順に、2文字に分けて入力する。（1
文字パターンのもは使わない）

※ルビは、ルビ定型で入力（被ルビ文字[]ルビ文字[]）

ルビ文字が続く時は一括してルビ入力する。

仮名でなくても、文字の右側にある文字はすべてルビ定型で入力する。

※文字の左側に、強調の○がある時は、その文字を〔 ～ 〕で囲んで入力する。

○は入力しない。

第14節 『古事類苑』から広がる世界—GIS・オントロジー—

『古事類苑』を電子化すること自体、決して容易な作業ではないが、本構想はそれだけで終わるものではない。将来的な構想では、本データベースを基礎に『古事類苑』を超え

るものを作ることを目指している。

こうしたビジョンを構想するに至ったのには、昨今の事情も背景にある。つまり、今のように、コンピュータが一般的になって来ると、データを電子化する行為には、何ら新規性が認められず、評価の対象とはならなくなりつつある。新しい課題や枠組みを常に考えながら、何をやるべきかという発想が求められるわけである。

単にデータを早く作るというレベルならば、現存文字コードだけによって「電子化完了!!」ということも可能であろう。しかし、先述の外字の例のように、わざわざ新たに字を作ってまでこだわった作り方をするのは、これらの作業によるデータの蓄積が、JISやISOといった国内・国際規格レベルでの漢字情報蓄積のための基礎資料の蓄積に貢献しているという道筋が見えるからである。

本データベースの形成には、現在、複数の機関の研究者が関わり、『古事類苑』を材料にして、新たな「知の創世」に取り組もうとしている。たとえば、国際日本文化研究センターの早川聞多・山田奨治氏とは、最も緊密な連携体制で進めている所である。早川氏は、画像との連携という観点で取り組み、『古事類苑』に採り上げられる風物や音などを組み合わせたマルチメディアデータベースを構想、山田氏は、地部3冊の電子テキスト化に取り組み、GISをはじめ、新たな「知の発見」への基礎データとして資源としての活用を構想している。

GISとは、Geographical Information Systems (地理情報システム) の略で、地図上に様々な情報を重ね合わせて分析し、その結果を表示させたりするシステムのことをいう。緯度、経度情報をだけでなく、そこに時間、つまり特定の時間における記録や情報を重ね合わせることによって、古典と現代をつなぐとことを構想するわけである。すでに、現代社会においては、GISの技術は欠かすことができないものになっているが、それを『古事類苑』の地部に含まれる歴史地理情報と連携させて、新たな「知の創出」を構想することを目指しているわけで、他に国文研の原正一郎氏も研究を進めている所である。

一方、稿者が構想するものはオントロジである。『古事類苑』では、先述の通り天部と歳時部の完成が近づいている段階にあるが、天文現象や自然現象、さらに言えば年中行事というものには、時代が変わっても比較的变化の少ない普遍性を保ったものが少なくない。2000年近い歴史の積み重ねで整理されてきた「類書」の記述には、極めて強い継承関係を持つという特徴がある。

[25]の表は、古典的類書の分類用見出しに使用される語彙、つまり、知識概念木(=オントロジ)にどれだけ共通する語彙が使用されているかを示したものである。それを見ても継承性が高いことが確認できよう。特に、現代語については、それを『分類語彙表』と比較してみると、古典類書に使用される語彙の1/4から半数近くが今なお継承されていることがわかる。

また、その共通する分野は、歳時・儀礼・自然などに集中するが、そのことは、つまり、古典語と現代語は、1000年以上の時を隔てても、概念上の枠組みが根幹から大きく変わるということではなくて、新たなものが生まれ、肥大化していったと考えることが出来るのである。つまり、現代まで継承性が確保されているオントロジと接合可能な部分を利用することによって、現代と古典世界とはシームレスな接合が可能であるといえよう。

地域・時代	撰者	件数 一致率	皇覧	釈名	北堂書鈔	芸文類聚	初学記	李暭百廿詠	事類賦	和漢朗詠集	【枕草子】	分類語彙 表	書名 件数/横欄(のべ数)
中国・魏	文帝	皇覧	2 2	0 0%	0 0%	0 0%	0 0%	0 0%	0 0%	0 0%	0 0%	0 0%	2(2)
中国・漢	劉熙成	釈名	0 0%	27 0%	3 11.11%	6 22.22%	5 18.52%	3 11.11%	7 25.93%	2 7.41%	7 26%	15 55.56%	27(27)
中国・唐	虞世南	北堂書鈔	0 0%	3 0.35%	847 14.52%	123 10.04%	85 4.60%	39 3.07%	26 0.83%	7 9%	82 9%	170 20.07%	847(874)
中国・唐	歐陽詢：等	芸文類聚	0 0%	6 0.81%	123 16.51%	745 66.67%	124 50.61%	88 11.81%	87 11.68%	33 4.43%	182 24%	174 23.36%	745(773)
中国・唐	徐堅：等	初学記	0 0%	5 1.48%	85 25.15%	124 36.69%	338 50.61%	80 23.67%	84 24.85%	31 9.17%	107 31%	120 35.50%	338(340)
中国・唐	李暭	李暭百廿詠	0 0%	3 2.27%	39 29.55%	88 66.67%	80 50.61%	132 47.73%	63 16.67%	22 16.67%	73 55%	54 48.48%	132(132)
中国・宋	吳叔	事類賦	0 0%	7 6.31%	26 23.42%	87 78.38%	84 75.68%	65 55.76%	111 24.32%	27 69%	80 49.55%	55 49.55%	111(116)
日本・平安	藤原公任	和漢朗詠集	0 0%	2 1.53%	7 5.34%	33 25.19%	31 23.66%	22 15.79%	27 20.61%	131 44%	59 44%	59 45.04%	131(134)
【日本・平安】	*清少納言	*枕草子	0 0%	7 2%	82 5%	182 3%	107 2%	73 2%	80 2%	59 2%	3492 37%	1299 37%	3492(19644)
日本・現代	国立国語研究所	分類語彙表 中の漢字語彙	0 0%	15 0.08%	170 0.95%	174 0.98%	120 0.67%	6 0.36%	55 0.31%	59 0.33%	1299 6%	17,835 6%	17,835(22,608)

[25] 古典類書間の語彙比較表
(『枕草子』語彙と分類語彙表[旧版]による現代語との比較を含む)

さらに注目すべき事は、『枕草子』中の語彙と類書語彙との比較結果である。

かねてより、『古事類苑』などに含まれる見出し語を利用して、古典本文の内容分類モデルが構想されることがあったが、この検証結果は、それを可能とする道筋を示すものとなっている。また、それぞれの分野にかかるオントロジにより切り分けて提示することにより、未知・未解読の古典文献を、それぞれが関心を持つ専門分野毎に情報を分別することや、各テキストがいかなる方面の語彙に集中する著述となっているかといった特性を求めることで、古典世界を新たな観点から捉え直すことが可能となるなど、その展開は新たな広がりを持つといえよう。

また、現代に記録された風景や自然現象についても、古典的類書で使用される語彙で構造化が可能となるだろう。地域・時代を超えてシームレスに接合された統合データベースが構想できるわけである。そのためにも、『古事類苑』のような大規模なオントロジは、有用な基礎資源となってくれるわけである。

とりわけ、映像・画像データベースのようなマルチメディアデータベースは、現在さまざまな所で盛んに作られているが、検索の工夫や情報の構造化という観点から見ると、十分な整備が進んでいるわけではない。それどころか、未だにこれといった決め手がないのが現状である。その意味において、オントロジによる現代と古典世界の接合というテーマは非常に魅力的である。

第15節 『古事類苑』研究の深化

『古事類苑』についての調べはじめてきた過程で、痛感されることに、『古事類苑』自体の研究がこれまでなされていなかったことである。

近年、幕末・明治期の研究が盛んになってきて、明治初期の学問状況についても、「語り部」のように思い出を語る人々の物故が続く中、当時の学問状況自体が研究・検証の段階に移りつつある。そうした状況下、『古事類苑』の存在は非常に重要である。

先述の『見本版古事類苑』は、『古事類苑』の編纂委員の1人、井上頼^{よりくに}の旧蔵書を調べている過程で、発見するに至った次第であるが、また、同じ編纂委員の一人の勢多^{のりみ}章甫の自筆本が、無窮会図書館には少なからず残されている。彼は旧官制における最後の明法博士で明治まで生きた学者である。

ここでは、同じく無窮会図書館に蔵される、彼の父の勢多章武の手になる『勢多本類聚国史目録』[26]についてふれておこう。



[26] 『勢多本類聚国史目録』

『類聚国史』は零本しか残っておらず、その元の部立がどうなっていたかは判然としていない。不明部分は推定によらなければならないが、この『勢多本類聚国史目録』には、諸本との校勘により、現行のものに加えてさらに20巻分の部立の内訳が記載されているのである。この書によれば、総計200部の内、160までの部立てを推定することが可能になるわけだが、本書の存在は、これまで知られることはなかったものである。

現在、一般に使用される『類聚国史』は1933年(昭和8)から1934年(昭和9)年にかけて刊行された『新訂増補国史大系』本であるが、これが編纂された当時は、『古事類苑』の編纂委員が編集・校勘に使用した図書、たとえば狩谷椽斎書入本のような研究上貴重な典籍は、まだ一般には閲覧可能な状態にはなっていた。そのため、国史大系の本文校勘には反映されていなかったのである。同様のことは、他の典籍にもあることで、『古事類苑』には、編纂委員の蘊奥が本文の中に眠ったままである可能性は高い。

このことを裏付けるものに、『古事類苑』の佐藤誠実編集長体制下における仕事ぶりを評した、滝川政次郎による以下の記述がある。

古事類苑の刊行が終わったのは、大正三年三月である。それ以後、古事類苑は、昭和十一年に一度再版された。その再版には、私も相談に与った。このたび、明治三十五年より同三十九年に至る期間、その頒布に当たった書肆吉川弘文館が、同館創業百周年を記念して、その再版を企画したことは、学界のために賀すべく祝すべきことである。同館の出版を予告するパンフレットには、成蹊大学の小島鉦作教授が「古事類苑解説」を書いておられるが、その一節には、

編纂の出来ばえは、三段に分かれている。佐藤博士が編纂校訂ともされたところは最上、校訂のみされたところはそれに次ぎ、長逝後刊行の部分は、さらに差がつくという。

とある。この評言は、明治四十一年九月以来、古事類苑の校訂に従事し、大正二年十一月、索引編纂の主任となられた竹島寛氏の評言であろう。竹島氏は、後に神功皇學館の教授となり、小島鉦作氏を教えられた。小島氏は、この恩師竹島氏の評言を受け売りされたものと思う。佐藤先生の検閲、訂正がいかに卓越せるものであったかは、この評言によって明かであろう。私は古事類苑を利用するに際し、その掲載史料を『新訂増補国史大系』本と引き合わせることを常としているが、古事類苑の引用文の方が正しくて、国史大系本の方が間違っているという場合に屢々遭遇した。また古事類苑の校正がよく行き届いていて、ミスプリントの少ないことは、学者の間に定評のあるところであって、専ら古事類苑の校正に当たられた竹島寛氏が、どんなに真面目な、学者的精神の持主であったろうかとは、私が古事類苑を見るごとに想うところである。

(滝川政次郎「佐藤博士の律令学」二 佐藤誠実と『古事類苑』の編纂 [『佐藤誠実博士律令格式論集』所収、1991.9、汲古書院] より)

我々は『古事類苑』をよく利用しはするものの、そこに引用されている文の素性が一体どのようなものかについては十分知っている訳ではない。中には、『古事類苑』の本文によることを批判する人も少なくないが、その可否はやはりきちんと検証されるべきであろう。そのためには、全文入力を果たして上での検証が最も有効かつ確実である。そして、それを可能とするレベルまで、データの蓄積を行うこと、こうしたスケールメリットこそがコンピュータを使用して行いうる研究の醍醐味である。

〔付記・謝辞〕

本稿は、2005年9月24日(土)、イタリア-フィレンツェ市ヴィッシュー研究所フェッリ広間(Gabinetto G.P.Vieusseux,Sala Ferri,pianoterra)にて開催された、イタリア日本研究学会(AISTUGIA)との共催による日本文学国際共同研究研究集会における口頭発表のテープ起こし原稿をもとに論文の体裁に整え、その際、新たに補訂・改訂を加えたものである。その、本論と同名題目を持つ原稿は「第29回イタリア日本研究学会・日本文学国際共同研究研究集会予稿集」(pp17-19(3))と、「2006年度基盤研究(S)報告書[代表:安永尚志]」と本稿があることとなった。本稿の執筆に際しては、全面的な改訂を加えてはいるものの、基本的構成・章立て・図版・資料等は、基盤研究(S)に基づくため、副題に〔補訂増補版〕を付するものである。

なお、本稿の考察に際して貴重なご助言を賜った石井行雄氏、本稿の執筆に至るまでの貴重な機会を与えてくださった安永尚志氏ほか本研究にかかわった多くの方々に記して深謝申し上げたい。